

Peopole's Views on Life and Lifestyles – a survey

特集 現代生活者の住まい・生活観(1)

● 現代日本の生活者意識から社会を捉える

生活意識調査の意義について 堀 啓造

現代生活者のライフスタイルと
生活意識の実像 御船 美智子

対談

今は、少子高齢化の進展によって
住まいの新しいリスクと価値が生まれる端境期

園田 眞理子 × 豊田 尚吾

生活意識調査の意義について

堀 啓造 *Written by Keizo Hori*

「生活意識」ということは、「生活」ということは曖昧であるが、日本人好みらしく肯定的意味でよく使われる。研究者を批判する時の『生活感覚』が無いなどの言い方はその例である。「生活者」なども肯定的に人をとらえた時の言い方であろう。

「生活意識」は心理学用語にはない。生活意識と類似する用語を心理学マーケティングの用語から探してみよう。生活意識が人間の行動を明らかにしようとしていることを手がかりに考えてみる。

生活意識と一貫性

一九〇〇年頃の人間が、なぜそのように行動するのかという問いかけに対する答えは「本能」であった。「本能」の次に考えられたのが「動機づけ」である。行動を引き起こすという機械論的な因果関係よりも緩い考え方が「一貫性、つまりパターンがあるとするものである。何か個人の行動に一貫したものがある」という考えである。そのような考えのもとには、「態度」や「ライフスタイル」ということばがある。このようなラインに生活意識という用語もある。

(1) 心理学からのアプローチ

人間の行動を解明するためにはさまざまなアプローチがある。人間の行動を探求する時に「何故」と質問を発することが多い。「何故」を考える時に主として考えられているのは動機づけや欲求である。

欲求論にはさまざまあるが、マズローの欲求階層説の影響が多方面に強い。マズローの考えの中で重要なのは、成長欲求・欠乏欲求である。欠乏欲求は食欲のように欠けているから、それを満たすものなら何でもいい。しかし、成長欲求は欠けているから欲しいのではない。例えば、尊重への欲求は何でもいいわけではなく、その人によつて替わってもらいたいこと、自慢したいことがそれぞれにある。それは子どもの頃に、何でも誉められれば喜んでるのは違っている。欠乏欲求が

ある程度満たされている現代において、成長欲求が重要になってい
る。人によって欲求を満たすものは異なっている。社会の発達段階、
個人の発達段階によって欠乏欲求が優位であったり、成長欲求が優
位になったりする。すべての国や個人が同じ段階にいるというのは間
違いである。

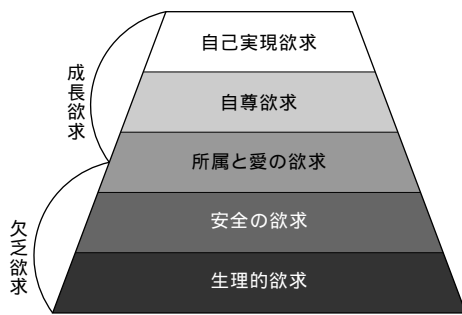


図1 マスローの欲求階層説の概念モデル図

「何故」に対する動機づけ
による回答は同語反復であ
る。例えば、食べるのは食欲
が喚起されたからであるとな
っている。また、動機づけを
消費者行動に関連させるに
は距離がある。そのために、
具体的に製品クラスに対す
る関心の程度をあらわす製
品関与が一九七〇年代から
言われたした。

念が用いられるようになって社会心理学の多くが態度の研究にな
っていった。

(2)マーケティングからのアプローチ

マーケティングの初期から使われていたのは人口統計学要因であ
る。年齢、性、居住地などが人口統計学要因と言われる。年収、学歴
など社会経済学要因もあわせて呼んでいる場合が多い。

人口統計学要因では、うまく購買行動を説明できないとされた
時に、まずパーソナリティにその説明を求めた。パーソナリティと消費
者行動の関係はすぐに否定された。

一九六〇年代、マーケティングにおいてパーソナリティ理論に見
切りをつけた時、ライフスタイル論が生じた。ライフスタイルは本
来行動に焦点を当てたもので、個人の行動間のつながりを探り、

一貫して生じる行動を
抜き出そうとするもの
である。意識・心理的要
因を重点に探るのが、サ
イコグラフィックス⁽¹⁾であ
る。サイコグラフィックス
はライフスタイルよりも
理論志向的であり、な
ぜ彼らが買うかを見る。
ライフスタイル論やサイ
コグラフィックス論やデモ
グラフィック要因を統合
したのがAIO⁽²⁾であ
る。

一般にはライフスタイル
サイコグラフィックス、AIO
を区別せずに使うこ
とが多く、まとめてライ
フスタイルと言っている。

生活意識は、「この三つのタイプのうちサイコグラフィックスにもっとも
近い概念である。」

米国でもっとも有名なライフスタイル分類はVALSである。改
訂版のVALSのURLは<http://www.sric-bi.com/VALS/types.shtml>
が出ている。日本版のVALSのURLは<http://www.tokyo.sric-bi.com/programs/vals/index.html>である。

日本ではライフスタイルという名のもとにさまざまな結果が発表
されている。

(1) A = activity ポーリング、店でのショッピング、電話で話をとるなどの行為。

I = interest その物、この話題に対する特別なそして持続的関心によって生じる興
奮の程度。

O = opinion ある「質問」に対する反応として出してきた「答え」。
その他に人口統計学要因・社会経済学要因を考慮する。

表1 AIOを構成する諸要因

活動 (activity)	興味 (interest)	意見 (opinion)	人口統計学 (demographics)
仕事	家族	自分たち	年齢
趣味	家庭	社会問題	教育
社会イベント	仕事	政治	収入
休暇	地域活動	仕事	職業
娯楽	レクリエーション	経済	家族人数
クラブ会員	ファッション	教育	居住
地域	食事	製品	地理
買物	メディア	将来	都市規模
スポーツ	達成の段階	文化	ライフサイクル

(3) 一貫性の否定

欧米系では自我を中心として一貫した行動や意見を持つことが求められている。ところが日本では、その場に合わせた態度をとることが求められる。これと類似した点に注目したものにリースマン『孤独な群衆』みずす書房、一九六四)の社会的性格の伝統指向型・内部指向型に対する外部指向型、またスナイター(『カメレオン人間の性格 セルフ・モタリングの心理学』川島書店、一九九八)のセルフ・モタリングにおける高セルフ・モタリングである。北山忍『自己と感情 文化心理学による問いかけ』共立出版、一九九八)は、一貫性への志向性の違いを欧米圏とアジア圏の文化差としている。つまり、アジア圏では思考・態度と行動の一貫性は大きく重要な問題ではない。そして、理論が排除される傾向にある。

生活という発想は、現実へつたり。領域固有どころかその場その場での処理が重要なのである。「人さまざま」「その時、その時」によって行動は変わる」と言ってしまう。何らかの一般性があるから学問として成り立つのであり、何かを取り上げて語る意味があるのである。ただし、北山の言うように、東洋において西洋とは異なる一貫性が求められているかもしれない。

ライフスタイル研究から言えること

(1) 無関心

鮎戸弘『売れ筋の法則 ライフスタイル戦略の再構築』ちくま新書、一九九九)は精力的にライフスタイル研究をしているが、そこから注目すべき結果を得ている。衣食住どれでも三割程度は無関心の層がいるという点である。どんなことにも関心を持たない人がいることを前提に研究しなければならない。Japan VALSからすると、先端の人たちの多様な関心に対して、いかなることにとも関心を持たない人がいる。

生活者として一括して考えるより、積極的に生きている人をまず考えるべきである。

(2) ライフスタイルが人口統計学要因か

一九八七年の新聞六社調査報告書において、新・夫婦五型というライフスタイルが出されている。ほのぼのフルタイム型夫婦(典型的な日本の夫婦)、いきいきクリエティブ型夫婦、おしゃべりな生活がしたい、ゆうゆうクラシック型夫婦(豊かにリッチな気分が宿るか)、そこそこマイペース型夫婦(かけがえのない平凡さ)、こつこつサステイナブル型夫婦(マイホームを夢みて、今は我慢)の五つである。その特徴づけを見ると、(夫の)年齢や学歴でだいたい分かれている。それぞれ、五〇代高卒、四〇代後半大卒、四〇代後半高卒、四〇代前半大卒、四〇代前半高卒となる。つまり、

これはライフスタイルではなく、デモグラフィック要因で切り取られるタイプ分けである。また大卒が洋風、高卒が和風となる。ライフスタイルが言われているからといってライフスタイルが万能というわけでない。デモグラフィック要因によって区分できるほうが、対応が楽になるのはいうまでもない。日本では、所得やライフサイクルが年齢と関係が強いので、ライフスタイルよりも年齢効果が強く出る可能性がある。ただし、所得がある程度以上になればライフスタイルのほうが有力な因子になるであろう。

表2 主要な価値志向(生命保険文化センター、2002)

集団志向	「社会への関わり」や「伝統的な家族」といった集団に対して責任と自覚を持って関わっていかうとする。
自立志向	リスクをとってでも積極的に努力・挑戦する意識を持ち、家族に対しても自立した個人としての対等な関係を重視する。
快楽志向	「現在の楽しみ」や「責任や努力を回避」することを重視し、「利己的な人間関係」を構築する。
自適志向	「気のあった仲間」と「自分のセンス」で「現在を楽しく」暮らすことを重視する。
安直志向	努力や苦勞を避け、他人の意見に同調し、依存することを重視する。

表3 食生活全般への満足度と地域のクロス表

		地域		合計	
		近畿2府4県	その他の地域		
食生活全般への満足度	満足	度数	76	294	370
		地域の%	41.1%	34.7%	35.9%
	やや満足	度数	66	345	411
		地域の%	35.7%	40.7%	39.8%
	どちらともいえない	度数	34	160	194
		地域の%	18.4%	18.9%	18.8%
	やや不満	度数	8	38	46
		地域の%	4.3%	4.5%	4.5%
	不満	度数	1	10	11
		地域の%	0.5%	1.2%	1.1%
合計	度数	185	847	1032	
	地域の%	100.0%	100.0%	100.0%	

るように見えても、統計的に有意とならないことが多い。特に五〇パーセント近くになるほど有意にならないことが多い。

(3) クロス集計表の調整済み残差

二×二のクロス集計表の場合、カイ二乗検定によって統計的に有意になれば個々のセルの大小について言及できるが、例えば二×三のクロス集計表では、個々のセルの大小について言及するのは早計である。このような時は調整済み残差というものを使用して個々のセルの大小を確定する(残差分析)。調整済み残差の値がプラス・〇より大きいと高頻度のセル、マイナス・〇より小さいと低頻度のセルとなる。この数値は分布の一・九六と同じである。もしも、多重検定が

気になる場合は、有意度の決め方についてボンフェローニの調整をすればいい。調整済み残差は他のセルとの差ではなく、平均値との差をとっているので十分コンサバティブであるので、あまり神経質になる必要はない。

食生活への満足度と年代の関連性、つまり年代によって食生活の満足度が異なっているという点に有意差がある。違いを探るのに、よくパーセンテージを見て解釈している。統計学的には調整済み残差を使う(表4)。調整済み残差の絶対

表4 食生活への満足度と年代のクロス表

		年代					合計	
		20代	30代	40代	50代	60代		
食生活への満足度	満足	度数	49	63	78	83	97	370
		年代の%	40.2%	27.0%	34.4%	34.9%	45.8%	35.9%
		調整済み残差	1.1	-3.2	-0.5	-0.4	3.4	
	やや満足	度数	42	98	98	98	75	411
		年代の%	34.4%	42.1%	43.2%	41.2%	35.4%	39.8%
		調整済み残差	-1.3	0.8	1.2	0.5	-1.5	
	どちらともいえない	度数	20	52	40	48	34	194
		年代の%	16.4%	22.3%	17.6%	20.2%	16.0%	18.8%
		調整済み残差	-0.7	1.6	-0.5	0.6	-1.2	
	やや不満	度数	7	16	9	9	5	46
		年代の%	5.7%	6.9%	4.0%	3.8%	2.4%	4.5%
		調整済み残差	0.7	2.0	-0.4	-0.6	-1.7	
	不満	度数	4	4	2	0	1	11
		年代の%	3.3%	1.7%	0.9%	0%	0.5%	1.1%
		調整済み残差	2.5	1.1	-0.3	-1.8	-0.9	
	合計	度数	122	233	227	238	212	1032
		年代の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

値が二・〇以上のところをチスクすればよい。六〇代の満足が三・四と高く、三〇代の満足はマイナス三・二と低い。次に二〇代の不満が二・五と高く、三〇代のやや不満が二・〇と高い。この四点が統計学的に言えることである。パーセンテージだけを見てみると、例えば二〇代に満足が多いように見える。また、二〇代の不満は特に多いようには見えない。このようにサンプルサイズによって有意になるかどうか違ってくるので、見かけのパーセンテージだけで判断するのは間違っている。

(4) 効果量

有意な連関があつたとしても十分に連関があるとはかぎらない。この点を判定するのが効果量である。クロス集計表の場合、 2×2 なら (ファイ) 係数そのもの、それ以外ならクレイマーのVまたはカイ二乗値を使って求める。SPSSでは 2×2 のクロス集計表以外でも出力されるのでそれを使う。前ページの表4のデータに対するSPSS出力は 係数 = 〇・一八一である。

効果量は、小〇・一以上、中〇・三以上、大〇・五以上と解釈し、この効果量は小ということになる。どの程度の効果量が求められるかということは分野によって異なる。その目安がない場合、心理学研究の発表論文においては小が多いことをまず考慮すればよい。この効果量も小である。効果量が小さいのであまり強く主張すべきレベルのものとは言えないが、主張を引っ込める程度とも言えないというところか。

サンプルサイズが大きいと、カイ二乗検定は有意になりやすいが、効果量を同時に考えることによって実質的な意味なく、有意になつた場合を排除できる。

(5) 高次のクロス集計表および探索 (catdap02)

二元クロス集計表より高次のクロス集計表の連関を知るには、通常のカイ二乗検定とは別の手法を使う必要がある。例えば対数線形モデルを使うことになる。この場合は、catdap02を使って関連を探索する方法を説明する。

男女に違いあり、年齢差があると分かっている時、男女差と年齢差

はどういう関係なのだろうかかと疑問を持たないだろうか。つまり男女 \times 年齢において交互作用があるのか、よくデータを説明できるのか、交互作用を考慮しなくても十分なのか、さらに交互作用がないなら、男女と年齢ではどちらのほうがその項目に関連しているのだろうか。このようないふことを考える時、catdap02(坂元慶行『カテゴリーカルデータのモデル分析』共立出版、一九八五)が役に立つ。

catdap02はAIC(赤池情報量)を計算する。AICのもつとも小さいモデルが最適モデルである。クロス集計表の分析の時は、AICがマイナスになる変数の組み合わせが連関があるものである。目的変数と説明変数を一〜三使った場合のクロス集計表のAICが出力される。AICは自由度が大きい場合にペナルティを与えるようにしているので、説明変数二変数を使って、そのうちの一変数の場合よりもAICが小さい場合は、二変数同時にクロス集計表に使ったほうがいいことになる。つまり高次交互作用が有意となる。カイ二乗検定とメ

カラムは違うが、カイ二乗検定の結果と似た結果をだす。AICがゼロ以下の変数および変数の組み合わせに注目すればいいので、多くの変数があつても目的変数と関連のある変数をすぐに割り出すことができる。坂元(一九八五)を読めば、いかに便利な道具か分かるので是非一読をおすすめする。

AICに二以上の差があれば、その二つのモデルは有意な差があると解釈できる。逆に二以下だとどちらのモデルを選んでも大した差がないということになる。

食生活への満足度を目的変数、性と年代を説明変数としてcatdap02

Summary of Subsets of Explanatory Variables response variable = 食満足度			
explanatory	variables	number of categories	AIC
年代		5	-0.03
---		0	0.00
性		2	4.76
年代	性	10	20.07

図3 catdap02出力

